
彼氏が欲しい!!

快丈風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼氏が欲しい！！

【Nコード】

N2141A

【作者名】

快丈風

【あらすじ】

伊夜は彼氏が欲しい。目的はただ一つ！とびっきりの恋愛をすること！…でも思いとはうらはらになかなか彼氏が出来ない…。果たして伊夜に恋人は出来るのか？！

仲良し3人組。

私は彼氏が欲しい。

抱き合うだの、キスだのは二次・三の次。

私は恋がしたい。

相手のことしか考えられなくなるくらい、誰かを好きになりたい。思ってもらいたい…。

「なあーんで、私には彼氏がいないのかねえ…。」

机に突っ伏し、開け放った窓の外を見ながら私はぼやいた。

「何？伊夜、彼氏欲しいの？」

そんな私を、友達（ともだち）の佐織（さおり）が除きこんだ。…にやけてる…完全にバカにしている…。

むくれて反対がわを向く。

「もー、伊夜ちゃん可愛すぎい〜」

爆笑する佐織。…ったく！！人の気も知らないで…！

「なに？さおりん、いよっちイジメてんの？混ぜてよっ！」

もう一人の友達・信子（のぶこ）が嬉しそうに近寄ってくる。

「のぶ！また伊夜が彼氏欲しいって。」

「あらあら、いよっち、またそんな事言ってるの？ウチらが居んじやん。」

佐織と信子は二人でニヤニヤしてる。

「信ちゃん（のぶちゃん）は彼氏いんじゃない。説得力無いよ。」

私がそう言つと、信子は私の向かいがわに黙って座る。

「彼氏と信ちゃんさ、ラブラブじゃん。私も彼氏作ってそうなりたいよ。」

私は信子の方を見ないで続けた。

「伊夜はホントに無知だねえ。」

佐織があきれた様に言う。

「悪かったね、無知で。」

すると、今度は信子が口を開く。

「あのね、いよっち。私と真司^{しんじ}はラブラブなんかじゃないわよ。」

「…そうなの？」

「そうよ。それに、男なんて恋愛するより、触れたりキスしたりすることしか頭に無いのよ。」

「…違う…。世の中の男はそんなのばっかじゃないはず。」

「どうして？どうしてそうって言いきれなのよ。」

私は顔をあげ、ムキになって反論する。

「でもさ、伊夜ってホントに今まで付き合ったこと、無いの？」

佐織が話題をかえる。

「そうよ。…佐織だって無いじゃん。…寂しくないの？」

「別に。私は男に囲まれて育ったからねえ。」

佐織は下に2人の弟がいる。

近所にも同世代の女友達がいなかったせいか、性格もどこかアツサリして、男にも全くといって良いほど興味無い。

「なぜか美形のアイドルや俳優にはたくさん好きな人いるみたいだけど…。」

「でもさ、佐織は良いよ。可愛いし、まつげ長いし、胸も私よりあるし…。」

「いよっち、それを言うなら私はいよっちより胸無いよ。」

「信ちゃんが良いの！彼氏いるじゃんっ！」

私はため息をついた。

そう言いながら、自分で自分を惨めにしている…。その状態が嫌だ。信子は下に一人弟はいるけど上にお姉さんがいて、どこか大人っぽい。

オシャレだし、ファッションセンスも良い。

私と同じで眼鏡をかけているけど、私より可愛い眼鏡だ。

「だから、男は節穴なのよ。いよっち、こんなに可愛いのに付き合わないなんて！」

「…無理しなくて良いよ…頭悪いし、スポーツはできないし…デブ

だし…眼鏡だし…。」

「伊夜はデブじゃないよ。でも痩せてもない。」

「ちょうどいいんじゃない、いよっち。それに眼鏡イヤならコンタクトにすれば？」

「イヤ。痛いし、面倒だし、高い。」

「なら無理じゃん。伊夜。他に何が不満よ？」

「私はこれまでナンパもチカンもストーカーもあつたことない。」

「いよっち…あいたいの？」

信子が吹き出す。佐織も笑ってる。

「確かに迷惑だし、犯罪だけども、二人とも声かけられたりしたんでしょ？」

「さおりん、あるの？」

「…まあ…。のぶは？」

「…あるかな…チカンとストーカーは無いけど。」

「…私も…。」

二人は確認しあってる。

「あー、もう良い。私、帰る。なんで教室にいつまでも残ってるのよ。」

私は勢い良く、イスから立ち上がった。

「あ、んじゃ私もっ。伊夜、待ってよ。」

「わたしもっ！」

こうして、なんだかんだ言っで、私たちは3人で過ごす。それが当たり前で自然だったからだ。

もう夕日が沈む。3つの影がゆらゆら揺れながら並んでいる。

今日も何の出会いもなかったな…。私はずっと、そればかりを考えていた…。

ミサンガに願いを込めて。

今日は土曜日。運動部に入っていない私には、休日だ。

こんな日は必ず外へ行く。

もしかしたら、出会いのチャンスがあるかもしれない！…今まで一度も無かったけど…。

私はとりあえず目的を作った。

今日発売の雑誌を買いに行く。

…別に今日じゃなくても良いけど、外へ行く口実だ。他人へも、自分へも…

外へ出ると空気が清々しかった。早朝でも無いけど。

私はいつも行く本屋へ行き、雑誌を買った。

ついでに30分ぐらい立ち読みをして、本屋を出た。

…用件が終ってしまった…。

他にすることも無いし、諦めて帰ろう…と思ったら、私は雑貨屋さんの前で足をとめた。

…良く分からないんだけど、行ってみようかな…という気分になった。

雑貨屋さんの中は可愛い小物やアクセサリーでいっぱいだ。見ていて飽きない。

私は以前から雑貨屋さんの雰囲気が好きだった。

でも最近あまり行っていないかったから余計にワクワクしていた。

その時、なぜか私はミサンガの前で立ち止まった。

「…綺麗…」

つい声に出してしまった。でも、そのミサンガはそれくらい綺麗だった。

スカイブルーに近いブルーと紺色、それに鮮やかなグリーンの糸でできているミサンガ。

ミサンガは小さなバスケットの中に入っていて、その少し上にお店

の人が書いた紹介文があった。

『アナタの願いを叶えるミサंगा。そのミサंगाが切れたとき、きつとアナタの願いも叶うはず!!』

…願い…かぁ…。

私の願いは一つしかない。…彼氏を作ること…そして、恋をすること…！

私はミサंगाを手に取り、レジに向かった。

そしてお店から出たら、すぐにそれをつけた。

…ミサंगाって…切れるまでにどのくらいかかるのかな…

気休めだろうとなんだだろうと、やれそんな事はやってみなきゃ!!

私は家へ向かって歩き出した。

…その時。

なぜだろう…ミサंगाをつけた左の手首が引つ張られたような気がした。

私は手首の方を見てみると…明らかに怖そうな男の人の袖のボタンに私のミサंगाが絡まっている…。…マズイッ!!

私はお慌てで

「すっ、すみませんっ!!スグに外しますっ!!」

と言って外そうとした…けど、ミサंगाは頑固に絡みついてて取れない…。

「…切ろうか、ソレ。」

男の人に声をかけられた。…うん、もう、無理だね…。

「はい…でも、ハサミ…」

と私が言った瞬間、その人はポケットからサバイバルナイフを取りだし、ミサंगाを切った。

私は突然のナイフの登場に驚いた。…その拍子に男の人を見た。髪は明るい茶色。

耳にはピアス、服装も派手で見るからにガラが悪そう…でも、年は私とそんなに変わらない気がした。

「ハイ、コレ。」

と言ってその人はミサングの残骸を私に手渡した。

…早すぎる…ミサングが切れるには…。もしや最短記録ではないのか？

私が頭の中でゴチャゴチャ考えていると、

「…じゃあ、俺、行くんで。」

と言って、その人は私とは反対方向へ去って行った。

私はなんとも言えないブルーな気分だった。

…ミサングには、確かに早く切れてほしかったけど、それは願いが叶う前提で…だ。

…もしかして…あの人が…？

いや、そんなはずない。

私の理想と違う。

あんなにガラが悪そうな人が好みではないもの。…顔はちょっと好みだけど。

でも、何しろその人の名前や年や…イロイロ分からないじゃん。

買ってつけて15分で切れるなんて、ミサングも想定外よ。

私はそう自分に言い聞かせて納得した…事にした。

やっぱ、私には彼氏は無理なのかなあ…と思ってしまふ土曜の昼下がりであった。

プレイボーイ。

週があけた月曜日、学校に行つて私はミサングの事を佐織と信子に話した。

二人は案の定大爆笑だった。

「伊夜、可愛過ぎいー!」

「いよっち、なんで土曜日に呼んでくれなかったのよ!」

「うつさいな!。言ったらこうなるつて目に見えてたから言わなかったんだよつ!」

…悔しいというよりもむしろむなし。…あまりに自分が惨めで…。

「あははは、でもさ、本当にその人が誰か分らないの?」

信子はこつちを見て言う。

「…うん。でもかなりタチ悪そうな不良っぽかった…。」

「意外と運命の出会いだったかもねえ。」

ボソツと言う佐織。冗談じゃないわよ。他人事だと思つて…。

「とにかく、もうあの事は土曜日に全部終わったのつ!これ以上からかわないでよ。」

またムキになる私。

「ま、良いじゃん。ホントに運命ならまた再会するだろうし。」

ニヤケて言う信子。その横で佐織もうんうん、と頷いている。

「…そうだね。ま、いつか。これにめげずに新しい恋探すぞつ。」

「あれ、伊夜にしては前向きじゃん。」

驚いたような佐織。

「なんかあっさり終わったせいかな…意外とさっぱりしてんの。」

「ほお…それは良い傾向なんじゃない?いつまでもくよくよしてるのもどうかと思うし。」

信子も納得したような顔だ。

「よし、んじゃあ気晴らしに保健室行こうつ!」

私たちは保健室へと向かった。

保健室の先生・向井先生は去年大学を卒業したばかりの若くて明るい。

親しみやすい性格なので保健室は休息の場になっていた。

「先生、来たよ」

信子が少しなれなく呼ぶ。他の先生は絶対に怒るが向井先生だけは違った。

「おつ、のぶちゃん！さおちゃんにいよつちも！いらっしやい！！」
こんな風に先生自体が生徒をあだ名で呼ぶため、どうしても友達みたいになる。

今日も保健室はたくさんの生徒たちで賑わっていた。

別にみんな体調が悪いわけでも、怪我をしているわけでも無いけど、安らぎを求めて自然と保健室に人が集まる。

「先生、授業めんどーい。保健室で寝よつかなあ。」

佐織が半ば本気かとも取れるような言葉を発する。

「さおちゃん、具合が悪いなら喜んで寝かせるけど、サボリにはベツドは使わせないよ。」

向井先生にあつさり断られて佐織はちえつと悔しそうな顔する。

「ところで、みんな、もうお昼は食べたの？」

「うん。とつくに。」

「オツケーオツケー。ベリーグッドだよ。君たち、ダイエットなんかしちゃダメだよ。」

「はぁーい。」

私たちは声を揃えて返事をした。やっぱり向井先生は好きだなあ…。その時、笑う私たちの後ろから、男の子の声がした。

「先生、オレ、昼から授業出るよ。」

「お、キヨ、偉い偉い。布団畳んだかい？」

「うん。」

私は後ろを振り返った…。

「あつ！！」

私とキヨと呼ばれた男の子は同時に声をあげた。

…昨日のミサングを切った人だ…

「あれ？キヨ、いよつちと知り合い？」

向井先生は意外そうな顔をする。

「えっ…知り合いっていうか…。アンタ、ココの生徒だったんだ…」

「…あなたも…。」

気まずい沈黙。

佐織と信子は状況を理解したのか、ニヤニヤしてる。向井先生だけは分からないみたいだ。

「えっと…昨日はゴメン…今度弁償するよ…。」

「あ、気にしないで。たいしたものじゃなかったし…。」

「そお？…あ、オレ、2 D組の松本^{まつもと きよはる}青春っていうんだ。」

「私は2 B^{いっぺんかいよ}…香坂伊夜。」

「ふうん…悪いけどオレそろそろ行くわじゃあね、先生。」

そう言つて青春は行つてしまった。

「…会つちやつた…また…。」

私はボソツとつぶやいた。すると今まで言いたいことを我慢していた佐織と信子が、

「ねえ、さっきの人でしょ。ミサングの人！」

「よりによつてD組の松本とはねえ…。」

と、口々に話し始める。

すると向井先生まで興味深そうに聞いてきた。

「ねえ、いよつちつてキヨと仲良いの？」

「ち…違います…。土曜日たまたま会っただけです…。」

私はうるたえながら答えた。ところが佐織がそんな私に追い打ちをかけるように言った。

「でもそれが運命の出会いだったんだもんねえ、伊夜。」

「やめてよ。そんなんじゃないって。」

「うん…確かに違うかもね…。」

と、信子がいっになく真面目な顔で言った。

「のぶちゃん？何か知ってるの？」

「いよっち…松本の別名知ってる？」

…別名？…そんなのがある人なのか…？

「…知らないけど…」

「…プレイボーイ・キヨ…」

プ…プレイボーイ…。私は分かりやすすぎるそのあだ名にかえって笑えた。

「何？キヨってそんな風に呼ばれてるの？」

「そうですよ、先生！D組の松本って言ったら1週間ごとに付き合ってる女が違うつて有名なんですから！」

力を込めて話す信子。すると話を聞いてた佐織が横から、

「あ…聞いたことある…女の取り合いで他校とケンカして謹慎くらったっていう…」

「そう、それ。だから純愛を求める、いよっちには向かないと思うけどなあ…」

「悪いけど、そんな気ないから。」

私は少し怒って反論した。

「そうなの？いよっちとお似合いだと思うけど…。それにキヨはそれ程悪い子じゃないよ。」

向井先生は苦笑する。

その時、チャイムが鳴った。騒いでいた生徒たちが自分のクラスへと帰っていく。

「さあさあ、みんな帰った帰った。授業遅れるよ！」

向井先生は追い立てるような口調で言った。でもその声はどこかあたたかい。

「はいはい。またね、先生！」

私たちもそう言って保健室を出ていく。

私はふと清春が寝ていたらしきベッドの方を見た。

几帳面に折り畳まれた布団が目に入ってきて、なぜかその光景がし

ばらく頭から離れなかった…。

やっぱり運命。

プレイボーイ…。

直訳すれば遊ぶ男の子。

プレイボーイが運命の人だなんて、信じるもんか！

放課後…私は一人だった。

佐織は部活があるという。信子は彼氏の誕生日らしく、今日は一緒に帰るそうだ。

「…独り者はつらいなあ…。」

ボソツと独り言。まあ、佐織は彼氏いないけどさ。

私は一人が好きだけど嫌いだ。

一人は気楽だけど、やっぱり寂しい。話し相手が欲しかった。

「あ…おい、アンタ！」

後ろから男の人の声がして、振り向いた。もしかして…ナンパ？するとそこには…

「あ…プ…。」

青春が立っていたのだ。ついプレイボーイと言いかけた。危ない危ない…。

「プ…？」

「あ、気にしないで…、松本君。」

「あ、青春で良いよ。…長いからみんなキヨって言うけど。」

「じゃあキヨで良い？私も呼び捨てで良いよ。伊夜っていうの。」

「伊夜…変わった名前だな。」

「…そうかな…。あ、帰り？」

「うん…伊夜も？」

「…うん。」

…なぜか沈黙。

ま…今日改めてお互いの素性を知ったわけだし…一緒に帰ろうとか言えないなあ…。

そんなことを思っていたら、キヨが話しかけてきた。

「なあ、土曜日のミサング、弁償するよ。いくら？」

「えっ… ホントにもういいよ…。 気にしないで。ボタンに引っかけてたのは私なんだし…。」

「ふうん… あっそ… ならさ…」

そう言いながらキヨが顔を近づけてきた。

「オレと付き合わない？ 伊夜…」

耳元でささやかれた。… マズい… 力ぬける…。

「なっ… 何言い出すのよ！ っていうか、今日はじめて誰か分かったような人と付き合わないわよ。」

「何？ 動揺してんの？ 伊夜って男知らないんだろ。真っ赤になってムキになって…。」

クスツと笑うキヨ。カチンときた。

「はあ？ 何言ってるんのよ。私はキヨみたいに軽そうな男はイヤなの。」

「軽そう… ね。ま、そうかもね。」

「… 自覚してるなんて… タチ悪っ！」

「オレと付き合っても、1週間しか一緒にいないよ。」

… 噂はホントらしい。

「最低…。 好きだから付き合ってるんでしょ。なのにそんなすぐに別れるの？」

「伊夜は純情だねえ。」

また笑うキヨ…。

「… みんなそうなんじゃないの？」

「悪いけど違うよ。少なくともオレは。付き合ってた中には何人が居ただけだね。しつこかったヤツ。こっちは別れるって言ってるのに、ずっとその気でいんだよ。笑っちゃうね。」

そう言ってまた乾いた笑い。

「… それ… 本気で言ってるの？」

「当たり前だろ。そもそも男と女が付き合うなんて本能だろ。誰だ

って持つてる。普段は理性だとか世間だとかに抑えられてたって、所詮人間は人間。それくらいにしか思っでないよ。」

なにそれ…そんなのおかしいよ。絶対変。

「…最悪…。ドキドキしないの？好きで好きでたまらないとか…思っただことないの？」

「ないね。恋も愛もない。根本は本能の問題。最終的には人間っていう種族を生き残らせるためのモノだろ。」

すらすらと言うキヨ。

「信じない。そんなの。少なくとも私は違う。」

「じゃあ伊夜は運命とか信じるの？純愛はあると思う？」

「思う。」

「ははは。どこまでも夢見る女の子だな。男はほとんどなあ、女は自分の欲求を満たすためのモノだと思っでないよ。そもそも女とは作りが違うんだ。」

「…じゃあ…キヨも女の子の事…そんな風にしか思っでないの？」

「当たり前だ。それに、付き合うなんてめんどくさい。オレは最小限の事ができればそれで良いんだけど。」

「最小限…。」

「してやるつか？」

なっ…。どこまでバカにする気！

「ふざけないでよ。」

なんだか、腹を立てるのがバカバカしくなった。

「はははっ。ホントに免疫無いんだなあ。ある意味伊夜みたいな子も好きだけど。」

「私はキライ。」

私はキヨから目を離れた。見たくもない。

すると、急にキヨは私の手首の辺りをつかんだ。

「いたっ…何するのよ…」

「女ってさ、不便だよな。力で男に勝てないもんね。」

…すごい力…ふりほどけない…。

すると、キヨは急に手を離した。

「やめたっ。キスの一つでもしてやろうかと思ったけど、オレは嫌がる女をいたぶる趣味無いし。」

…ドキドキしてる…。ホントに免疫無いんだ…私…キスって言葉にドキドキしてる…。

黙って背中を向ける私に、キヨは聞いた。

「男、幻滅した？でも、事実だから。伊夜には悪いけど。」

その時、私は自分でもびっくりする事を言っていた。

「キヨ、付き合おう。」

「はあ？今、なんつった？」

私は向き直ってキツとキヨを睨むように見た。

「キヨ、私と付き合いたいんでしょ。付き合おう。私がキヨを変えてあげる。」

「伊夜さ、何言ってるの？」

「ドキドキしない恋なんてホントの恋じゃないよ。私とホントの恋しよう。私がキヨをそうさせてみせるから。」

「へえ。オレを変える…。ホントにできるの？」

「する。1週間しか持たない付き合いなんかじゃない。土曜日の出合いが運命だって言うならそうかもしれない。」

「運命ねえ。ホントに伊夜にできるの？男と付き合ったこと無いんだろ。」

「その方がかえって都合良いじゃない。」

「はははっ。ま、オレは良いけど。退屈しないですみそうだし。ただし、」

「オレが伊夜に飽きたらその時点で別れる。良いな。」

「良いわ。」

「よし、じゃあ、ま、よろしく。」

そう言ってキヨは帰って行った。

…キヨが見えなくなったら、急に全身の力が抜けてきた。

…ドキドキした…心臓の鼓動がありえない。

男の子って…あんなに力強いんだ…。声、低いんだ…。

知ってるはずの事が一つ一つ新鮮で、鮮明に残っている。

はつきり言って、自信は無い。

キヨを変える…なんて大きな事を言い切ったけど…確かにキヨの言うとおり、私は男を知らない。

でも、だからこそできることがあるはずだ。

理想とは違ったけど、私は男の子と付き合う。これは事実じゃん。

…それに…

私、自分で言っておきながらキヨの事、本当に好きになったみたいだ。今日改めて知ったばかりのはずだけど。

私のドキドキなんて、キヨは分からないだろう。

なんとも思わないかもしれない。

でも、今はそれで良い。これからキヨにドキドキしてもらうんだ。

わたしの顔と同じぐらい赤い夕焼けを見て、私はそんな事を思っていた。

はじめの一步。

私たちの出会いは突然だった。

それって運命だったのかな…？

「付き合うの？！あのプレイボーイと！」

佐織と信子が声をそろえて叫んだ。

「ちよつと、もう少し静かにしてよ…。」

ここは帰り道にあるハンバーガーショップ。

周りのお客さんは突然の叫び声に驚いて、こつちを見ていた。

「それで？どうして付き合おうと思ったのよ。」

さすがに周囲の視線を感じたのか、さつきよりも声をひそめて佐織が尋ねた。

「なんか、キョってホントの恋愛してないなって…そう思ったら、それじゃダメだって思ってた…。」

「ま、いよつちは恋、してないけどね。」

呆れたような口調で素っ気なく言い放つ信子。

「…そうだけど…。」

「でもさ、伊夜、よりによってプレイボーイだよ！そんな奴とホントの恋するって、本気でできると思ってるの？」

佐織が聞く。

「…やってみる。」

「…それしか言えないよ…。」

「やってみるって？どうしてみるのよ？」

信子はいっぴになく突っ込んでくる。

「…もう、良いから。ごめん、こんなこと話して。私、帰る。」

私はその場に居られなくなって席を立った。

「ちよつと、伊夜！」

後ろの方で佐織の声がした。でも、そのあとで小さく信子の声が「ほつときなよ。」

と聞こえた。

…私は悔しかった。私に理解を示してくれない友だちに…。
どんな人だろうと私は付き合うつて決めた。…なのに…。

「よお、伊夜じゃん！」

後ろから肩をつかまれた。

声が男だ！

ギョツとして振り返ると…。

「…なんだ、キヨか…。」

「なんだじゃないだろ。俺さ、一応彼氏なんですけど？」

キヨは不満そうに言った。

「…ごめん…。帰り？一緒に帰らない？」

「おう。」

私達は歩き出した。

微妙な距離を保ちながら。

「…なあ…」

キヨが話しかけた。

「なんかあつたのかよ？」

「…まあ…いろいろ…」

「ま、あんまり気にすんなよなな」

あつさりと言うキヨ。

…誰のせいで落ち込んでると思ってるのよ！

…うん…？…待てよ…。気にするな…って事は、多少励ましてくれてるの？

「…なんだ、キヨって優しいじゃん」

唐突に…しかも自然に私が言い放ったせいか、キヨはびっくりしてこっちを見た。

「別につ、優しくねえよつ。いきなりなんなんだよオマエ…」

「…そんなにムキにならなくても…」

「伊夜が変なこと言うからだろ。…ったく…そもそも俺たちが付き

合いはじめた訳、分かってるのか？」

「忘れてないよ。…私のこと…飽きた？」

「…飽きたっていうか呆れた。俺に立てつく女は伊夜がはじめてだったのに…特に何も無いじゃん」

「な…何もって…どんな事があつたら良いのよ…？」

「ま、普通なら昨日の間にキスする。早かつたらその先もやってる」

「…その先…」

「…なにそれ…だいたい想像出来るけど…」

「何？興味あんの？」

「からかうように言うキヨ。」

「違う。…そうじゃないでしょ」

私は立ち止まってキヨを見た。

「そんなの違う。そうなるまでには時間がかかるの。そんな簡単にしないの」

「じゃあ、はじめは何すんだよ？」

私は黙って、キヨの前に手をさしだした。

はじめは何のことか分かってなかったが、理解するとキヨは私の手を握った。

「こつからはじめるのが伊夜式だよ」

「…悪い？」

私が聞くと、キヨは

「いいえ。べつに」

と妥協した様に言った。

キヨには悪いけど、私はこれだけでドキドキしてるんだから…。
大きいてのひら…。

しかも手は私の方が冷たかった。

何気に私に歩幅を合わせてくれるし…車道側歩いてくれるし…。

ほら、キヨは優しいヤツじゃん。

プレイボーイだけど…良いところあるよ。

…何とかやれそうだよ。

私はキヨに気付かれないように、少しキヨの方へ近付いた。

キヨは気付いたのか分からないけど、さっきより握る力が少し強くなった気がした。

手を繋いだ二つの影は、ゆっくりとした歩調で、夕日の沈む方へ消えていった。

喧嘩上等！

「伊夜！ちよつと！」

朝、登校してきた私に佐織と信子が駆け寄ってきた。

「…なによ？…おはよ…」

私は訳が分からず、とりあえず挨拶。

「ったく、おはようじゃないわよ！昨日、プレイボーイと帰ったでしょ？」

佐織が言った。…なにそれ。

「悪いけど、キヨだよ。確かに昨日は帰ったけど、それが何か？」

…ほつとけ…とか言ってたくせに…。

「そのキヨのせいで、標的になったよ、いよつち」
信子が言った。

…標的…？…なに…それ…。

詳しく尋ねる前に、その理由が分かった。

急に後ろから声をかけられた。

「ちよつと良いかしら？」

振り返ると、ドラマとかにいそうな美少女が立っていた。…でも…

目がキツめなカンジ。

「あ…えつと…私に用？」

「そう。ちよつと来てくれる？」

そう言っただけで彼女は出口に向かって歩き出した。

…なによ…。そっちがそのつもりなら…やってやるわよ。

「のぶちゃん」

私は信子に声をかけた。

「ん？」

「コレ、よろしくね」

そう言っただけで私はカバンを渡す。

少し驚いた顔をしたが、信子は私のカバンを受け取って、一言。

「遅刻すんなよ。後20分だからね」

「了解!!」

私は教室を出た。

私は階段の踊り場に連れてこられた。その階段は、生徒玄関とは反対側なので朝はほとんど使われていなかった。

行ってみると、そこには2人の女子生徒がいた。

「それで？何の用？」

私はあくまでも冷静を装って言った。内心ビビりまくりだけと…。

「キヨと付き合ってるんでしょ？悪い事は言わないから止めなさい」
私を呼び出した女の子が言った。

「そんなの私とキヨの勝手じゃない。あなたに関係ないわ」

私がそう言つと、2人のうちの一人が言った。

「あなた、遊ばれてるのよ。痛い目に会いたくなければ彼から手を引きなさい」

…手を…引く？

「私はキヨと恋愛してるの。かけひきしてるんじゃないわよ」
失礼な！仮にも人の彼氏でしょっ！

「…なまいきね」

美少女は言った。

「なまいきで結構」

私も引き下がらない。

しばらくお互いが睨みあっていた。

そのとき…

声がした…。

「もしもし、お嬢さん方、あと10分でHRですか？」

そう言つて、誰かが階段の物陰からにゅっと現れた。

…キヨだ。

「キヨ…」

美少女がつぶやく。

「よお、和深^{かずみ}じゃん」

陽気に右手をヒラヒラさせるキヨ。

「いつから居たわけ？」

今度は私が言った。

「んーと…ずっとかな。なにせ、俺の特等席だから。ココ」

そう言つて階段を指差す。

「ねえ、キヨ、なんでこんな子と付き合ってるの？なんで私じゃないの？」

和深と呼ばれたその子はキヨに言った。

「なに？そんなに不満か？」

「モチロンよ。しかも私と付き合おうって言ったのはあなたの方よ。なのに…」

それを聞いたキヨは

「あのさ、コイツは和深と違うの。俺と付き合う理由も、俺に求めるものも」

…えっ…？

「どういうことよ！」

和深はキヨにくっついてかかった。

「あのさ…」

そう言つと、キヨはクイツと和深のアゴを指で持ち上げた。

「アンタが俺に望んだのはなんだ？俺の体だろ？彼氏にフラれて寂しくて、俺に慰めてほしかっただけだろ？」

和深はキヨから目をそらし、後退りした。

するとキヨは私の首に腕を回し、続けた。「でもコイツは…伊夜はさ、はじめに何しようって言ったと思う？手をつなごうだってさ」
そう言つてキヨは笑った。私はドキドキしていた。

「悪いけどさ、俺、しばらく伊夜というわ。ホントの恋愛とやらができそうだって思いはじめたんだ」

「あなたが…ホントの恋愛ですって？」

和深はフツと鼻で笑った。

「悪いか。お前らみたいなプライド高くて未練がましい奴はもう沢山だよ。俺のことは諦めな。あと、伊夜にも手を出すな」

キヨがキツめの口調で言った。

その言い方に驚いたのか、和深たちは少しひるんだが、スグに

「フンッ」

とこつちを睨みながら去っていった。

3人がいなくなり、私とキヨが残った。

「…何それ…」

私が言う。

「へっ？」

…とキヨ。

「シャツ」

私はそう言ってキヨの制服のシャツを指さした。

それは、ボタンが全部外され、裾が小さく結んであった。下に着ている、派手な青のＴシャツがとても目立つ。

「何？ヘン？」

「…派手…」

「マジか？俺の中では最先端のイケてるファッションなんだけど？」
そう言ってまた笑うキヨ。

「…別に良いけど。それでも…。…あと…」

私はキヨを見た。

「ありがとう」

あえて、何に対してのお礼かは言わなかった。全部をひっくり返すためのありがとう。

そんな私の気持ちがかかっているのかいないのか、キヨはお気楽そうに

「おう」

と言った。

「…教室…戻ろっかな…」

「あ、んじゃ俺も」

そうやって教室へ向かおうとしたとき誰かがいた。
良く見るとそれは…

「信ちゃん！佐織！」

そこにいたのは教室にいるはずの二人だった。

「どうしたの？」

駆け寄る私。

固い表情の二人。

…キヨが降りてきた。

それに気がつき、信子がキヨを見る。

信子に気がついたキヨ。急に顔色が変わる。そして…一言呟いた。

「…信子…」

……………えっ？……………。

今…何て…。

ここにいる全員の動きが止まった。

私は信子を見て、信子はキヨを見て、キヨは信子を見ていた。佐織
だけは誰も見ないで床の方へ視線を落としていた。

……………今…チャイムが鳴った…。

…全員遅刻決定。

知り合い以上、恋人未満。

「アンタさ、失恋したんだろ？」

キヨが私に初めて言った言葉。

私は1年付き合っていた彼氏と別れた。原因は彼氏の浮気。私の他に2人も彼女がいた。

『信子は良い女だと思うよ？でもさ、良いだけで他には何にも無いんだ。つまらない。一緒にいて疲れたんだよ』
…そう言っ て私と別れた。

一人で校舎裏で泣いていた。その時声をかけてきたのがキヨだった。ただでさえ感傷的な私にそんな言葉は不愉快この上なかった。

「アンタなんかに関係無いじゃない」

「…っと思っ じゃない？実は関係アリなんだな。ここは俺のナワバリなんだよ」

「…は？」

意味不明。

「キミさ、今は授業中ですよ？それとも何？俺ねらい？」

…何？この男。

「ふざけんじゃないわよ。もう男はこりこりなの。それに、アナタだっ て授業サボってるじゃない！」

「俺は良いの。常連さんだから。でもキミはマジメっ子でしょ？」

「何それ。メガネかけてたらみんなマジメっ子だと思わないでよ！」

「いや…んな事言っ てないし」

ケロッと答えるキヨ。

「もう、ほっ としてよ」

そう言ってまた泣き出す私。

それを見て、キヨは溜め息まじりに私の横にしゃがみ込んだ。

「あのさ、俺はメガネかけてる子って、カワイイと思うけど？」

「…そんな事で泣いてるんじゃないんだけど…」

「うん…」

急にしおらしいキヨ。

「何よ…コロコロ変わって…アナタって変なヤツ」

「けっ。勝手に言ってる」

「…なんで隣に居るのよ？」

「…なんとなく。アンタ、ほっとけない気がしたから」

「…余計なお世話です…」

そう言って、お互いに笑いあった。

私たちは、それから何となく一緒に居た。それが当たり前のように…。

キヨの事、好きかキライかといえば…好きだった。…少なくとも私は…。

告白とかは無かった。付き合うという宣言をキチンとしないまま、私たちは何をするにも一緒だった。

「俺たち、恋人みたいじゃねえ？」

いつだかキヨが私に言った。その表情が、複雑すぎてキヨの気持が分からなかった。

私は、

「そう？」

とそっけなく返事をした。

ちよっとシヨックだったから。私は付き合ってたつもりだったから。でも、所詮つもりはつもりだった…。

キヨに彼女ができた。

正確には私を知る前から付き合っていたから、彼女がいた…となるけど。

私はその事を知ったのは、その本人から言われたから。

「あんだ、キヨのなんなの？」

私に聞いてきた人は、高校の制服を着ていた。

…私？

キヨの…友達？…それとも…

「おっ…もしかして修羅場？」

キヨが急に現れた。まるで、今まで側で見ていたかのように…。

「キヨ、なんでこの子とずっといる訳？私、アナタの彼女でしょ？」

彼女の方が私を指差しながら言った。

…どうなの？キヨ…。

すると、キヨは急に冷たい目になった。

「悪いけど、二人とも彼女だと思ってない」

えっ…？

「俺さ、一人の女の子をずっと愛せない訳よ。どうしても飽きる。
美佳^{みか}も信子もただの女。それだけ」

そう言ってキヨはクルッとこっちに背を向け、ヒラヒラ手を振って去っていった。

ちなみに、その2日後、キヨには新しい彼女が出来ていた。私より一つ年下の子だった。

涙も出なかった。

自分が情けなかった。

付き合っていると思い込んでいた自分がみじめだった。

それから私はキヨと全く会わなかった。会わないようにした。

風の噂で、キヨの受験する高校が私と同じと知った。キヨが居る…という理由で志望高を変えるのもくやしくて変更はしなかった。

高校に合格してしばらくしたころ、彼氏ができた。今でも仲良くしている。

この前、保健室で見掛けたとき、驚いたけれど平静を装った。いよつちも、さおりんも知らないから。

いよつちがキヨと付き合うと知った。私は心配になった。私だけではなく、いよつちまで…。

いよつちが女子に呼び出されたとき…ついさおりんに言ってしまった。

さおりんはそれを聞いて、無言でいよつちを追いかけた。私もついていった。

結局その人たちはいなくなった。…でもね…キヨ、アナタに言いたいの。

いよつちを、私のようにさせない。

固まるキヨといよつち。うつ向いたままのさおりん。
私は沈黙を破るように…キヨを真っ直ぐ見て言った。

「キヨ、いよつちと別れて」

仲直りはイチヨウの木の下で。

別れる？

何で信子がそんなこと言うの？

そんなに私とキヨが付き合うのが気に入らない？

「信子…？どうしたの？…何よ…突然…」

戸惑いながら言う私。

信子は黙っている。キヨも…。

すると、さっきまで黙っていた佐織が急に口を開いた。

「信子はね…キヨに裏切られたのよ」

「違うつ！」

すぐさま反論するキヨ。

「裏切った…？」

…訳が分からない私。

「いよっちは…分かってるの？キヨがどんな男か…」

「…それって…キヨがプレイボーイって事？」

「そうよ。キヨはね、一人の女じゃ満足出来ないのよ。だからいよっちも、このまま付き合っているなら絶対に後悔する」

「…信ちゃん…」

私はキヨを見た。下唇を噛んでうつむいている。

「いよっち、私はいよっちが心配なの。私みたいになるんじゃない

かと思つて…」

「…信ちゃん…一体二人に…何があつたの…？」

黙り込む信子。

「こらっ！お前ら、早く教室に戻らんか！」

皆が振り向くと、先生が立っていた。

「今はホームルームだろ。教室へ帰りなさい」

「…はあい…」

先生に促され、私たちは教室へ向かった。

私たち3人が教室へ入ろうとしたとき、信子がキヨに一言言った。

「いよつちとのこと、考えてね」

キヨは何も言わないで自分の教室へ帰って行つた…。

遅刻した私たちは後ろからそそくさと入った。

担任はカバンを置いたままで遅刻してきたことを少し不審に思いつながらも、私たちは特におとがめ無しだった。

「信ちゃん…聞きたいことがあるんだけど…？」

私は昼休み、信子の所へ行つた。いつもは弁当を食べるのだが、今日はそんな雰囲気ではない。

「…キヨの事？」

信子は意外と何でもない顔で言つた。

「…何があつたか…教えてくれない？」

その時、佐織がやってきた。

「…ねえ…二人とも…昼ごはんにしない？」

気まずい雰囲気を感じてだろうか？いつもより明るい声で誘った。

「…さおりん、話が終わったら食べる。…先に食べてて良いよ」

すると佐織は一瞬驚いた顔をしたが、何かを理解した顔をし、

「分かった。今日は夏奈子たちと食べる」

と言って去っていった。

佐織は分かったのだ。

信子が今、私と二人で話をしたいということ。

それを直接言わなくても佐織なら分かるということ。

…それは私にも分かった。…これが友達なんだな…。

私と信子は校庭の隅の大きなイチヨウの木の下に行った。

今は昼休みだから、生徒はいない。

「本当はね、裏切られたんじゃないかな。キヨに…」

信子が口をひらいた。

風が冷たい。

風にのって、ツン…と銀杏の香りがする。

イチヨウの葉が落ちる…。

私は黙っていた。

信子は私に背を向け、離れていくようにゆっくりとした足取りで歩く。

「片想いなのは分かった。一緒に居たら好きになってた。…でも

…」

振り返る信子。

「キヨには彼女がいた。その彼女は、恋人でもない私がキヨと居る

のを見ていられなかった…でも…実はもう、二人ともキヨは何とも思っていないかった…」

「信ちゃん…」

「キヨはそういうヤツなのよ。片想いでもダメ、両想いになってもダメ…いよつちに…それが耐えられる？」

…風がさらに冷たくなる。

カサカサと葉が足元を舞う。

「…分からないけどさ…私でも…ダメなのかな？」

信子より小さな声で言う私。

「無理よ。キヨはそういうヤツなのよ」

「…例外は無いの？」

「無いわ。…いよつちに…覚悟があるの？捨てられるのが分かっている相手と付き合うなんて…」

分かっている。

怖いよ。

悲しいよ。

情けないよ。

…でも…

「分かっているから。大丈夫だから。…キヨを…変えてやるから！」

私はさっきよりも大きな声で言った。

「…知らないよ？どうなっても…。後悔しても…」

「信ちゃん、後悔は後から悔やむから後悔なんだよ」

ニコツと笑う私。

少し目を丸くする信子。

「私、後悔したって良い。キヨが好きなの！信ちゃんが好きだったみたいに、今は私がキヨを好きなの！」

「いよっち……」

私は信子に近付く。

「私、キヨを変えるって決めた。プレイボーイなんてあだ名じゃなくなるくらい、イイ男にしてやるんだからっ！」

「…出来るの？いよっちに……」

「出来るかどうかは後。とりあえずしてみるの！二人でとびっきりの恋愛をするの！」

すると信子は小さくため息をついた。

そして少し微笑んでから、

「分かってたよ。…やれるところまでやんな。…私は見守っとく。」

でも、これだけは忘れないで」

信子はポンっと私の肩を軽くたたき、

「私はいよっちの味方だからね」

と言って笑った。

私も笑った。

いつの間にか風はやんで、うろこぐもが空を漂っていた。でも、銀杏の香りはまだ残っていた……。

仲直り パート2。

いつもの待ち合わせ場所に居ない。

でも、これは予測済み。

多分…アイツはまだ学校に居る。しかも…どこに居るかも分かる…。

私は校舎裏へ行った。

すると、案の定キヨが座り込んでいた。

「はい」

キヨの前にさつき自販機で買ったレモンティーの缶をさしだす。

ビックリしたキヨはいきなり現れた腕の主を見る。

「…伊夜か…サanky」

素直に受けとるキヨ。

「おごり。…120円貰うのもなんだし…」

「ノド乾いてた。…でも…俺的にはホットが良かったな…」

「売り切れ。文句あるなら返しなさい」

「いや。飲むよ」

少し微笑んだキヨ。

ガチャッ、プシュッ…

缶をあける私達。

北風がふく。…もうすぐ冬かな…折角、秋になったばかりなのに…
やはりホットが良かったな…と思いながらボーツとしていると、キヨが話はじめた。

「…ココさ、信子と初めて会ったトコロなんだ…なんか懐かしい…」
「知ってる。…信ちゃんから聞いたよ」
「…そっか…」

また沈黙…
相変わらず北風はピューピュー吹く。

今度は私が話はじめた。

「…キヨにとつて…信ちゃんはどんな存在？」
「…恋人でないことは確か。でも友達つてのも違う…」
「…信ちゃんの事…好き…？」
「…分からない」
頭を抱えるように顔を伏せるキヨ。
「そういうことを真剣に考えたことが無かった…でも…信子には好きっていう感情は無かったと思う…」
「…そっか…」

また沈黙。

「ならさ…」
私がまた言う。
「私は？恋愛感情、ある？」
一番聞きたいこと。

するとキヨは、ある意味予想どおりの答えを言った。
「…わかんねえ…」
「…だろうと思つたよ。」
「…なんで分からないの？」

「うーん…うまく言えないけど…」

キヨは困ったように頭をかきながら言う。

「なんか伊夜って、今まで会った女に居ないタイプなんだよ。それに、今まで真面目に好きとか考えた事無いし…恋愛感情ってのが、どういうものか分からない…」

「じゃあ…私と別れたい？まだ1週間過ぎてないけど…」

「いや…それは違うって分かる。多分、ここで別れたらこの先ずっと後悔する…」

「…そっか…良かった…」

「…はつきりしないヤツで悪いな…」

「なんとなく分かってたから良いよ。キヨって、意外と手際悪そう」
「…そうだな…カッコ悪いな…。伊夜は…信子の事…気にしてるのか？」

「さあ…。ビックリはしたけど、それほどじゃないかも」

「そっか…」

日が落ちるのが早い。辺りはもう薄暗い。

「ねえ、キヨ…」

「うん？」

「あたしたちさ…」
立ち上がる私。

「これでカップルって言えると思う？恋してる訳？」

「さあな…」

キヨも立ち上がる。

「良いんじゃない？俺らみたいなのも、きっと世の中には必要だ」
「…そういうもん？」

キヨを見上げる私。

「おそろく」

二カッと笑うキヨ。

ま、いつか。こんなカップルでも。
私はキヨの事好きだもん。

うっくん…と大きくのびをするキヨ。

小さなあくびが出た私。

「伊夜、帰るか？」

「うん。帰る」

カップルなのか何なのか、結局曖昧に終わったけど…こんなのもアリかな…と思った、秋の放課後。

カップルになるために。

私たちは何とか仲直りした。ケンカしていたのかどうかもよく分からないけれど……。

でも……私は何かが違うと思っていた。

これって本当に付き合ってるって言えるの？私は恋がしたかったハズだ。でも今は恋するどころか付き合っているのかすら疑問……。でもその解決方法はよく分からない……。

「うーん……」

「どうした、いよつち。悩むとハゲるよ？」

……この声は……。

「信ちゃんっ！失礼な……私はハゲませんっ！」

「そう言ってる人ほど危ないよん」

ニヤニヤと意地悪そうな顔。

……でも良かった。また信ちゃんと普通に話せる。私にはそれが何より嬉しかった。

「あれっ？さゆりんは？」

「部活。大会近いんだってえ……」

「そっか……ところで、真面目にどうしたの？」

「……うーん……」信子に言うべきか……？キヨと恋人らしく付き合っにはどうするか……なんて。

「あのさ、変な気遣いならやめてよね。私にはもう彼氏がいるし、

キヨの事もあきらめたのよ」

……そういう事なら……。

私は信子に話してみた。恋人らしくなる方法について…。

「……そっか。確かにあんたらは恋人というより友達だね……」

……やっぱりそう見えてた……。

「あんまり考えこまないほうが良いんじゃない？ 気楽に考えなよ」
信子がボソツと言う。

「……どういうこと？」

「いよっちは多分、恋人だのカップルだのイメージにとらわれすぎなんだよ。実際はもつと手の届きやすい、楽なもんだよ」

「……そうなのかな……」

「うん。だからさ、自然に……いよっちの思うようにやってみなよ」

「……そっか……そうだよな。ありがとう、信ちゃん」

信子に言われて、急に肩の力が抜けた。

「ありがとう、信ちゃん」

「いえいえ、どういたしまして。なんかあったらいつでも言いなよ」

「うん！」

その後、私は信子と別れてキヨとの待ち合わせ場所に行った。

「キヨ！」

「遅いよ。っていうか、今まで俺より早かったことあるか？」

「どうだったかな……ま、気にしないで。帰ろう」

「……はいはい。ちよつとは気にしろよな……」

私たちは歩きだした。手を繋ぐのは当たり前になっていた。

「……ねえ、キヨ……」

「何？」

「私たちは付き合ってるんだよね？」

「一応……」

「……一応か……よしっ！！」

私は立ち止まり、キヨの方を向いて言った。

「明日から、お昼は一緒に食べよう」

「……はっ？」

「私、キヨの事をもっと知りたい。キヨが何考えてるのか、どう思ってるの、とか……だから一緒に居る時間を長くしたいんだ……ダメかな？」

「ダメじゃないけどさ……唐突だな……」

「思い立ったらまず実行。それが私だよ。……了解？」

「了解了解！んじゃ、明日迎えに行きます。校舎裏で食べれば良いだろ」

私の粘り勝ちだ。

「ありがと。さっすがキヨ」

私は嬉しくなつて無意識の内に笑顔だ。

「調子良いなあ、オマエ」

苦笑いのキヨ。

この後も少し雑談をして、私たちは別れた。

さ、明日は気合い入れてやるぞっ！！

作戦実行……?!

朝6時……。

いつもならぐっすり眠っている時間だ。

しかし私はもう起きていた。起きて……台所に居た。

「あとは、オニギリだけだ!」

私は完成目前になった2つのお弁当箱を見る。

私たちが目指すカップルへの第一歩は『一緒に手作りのお弁当を食べる』事だった。そのために昨日、お昼を食べる約束を取りつけ、一時間も前から弁当づくりに励んでいた。

女ったらしで『プレイボーイ』などとあだ名がつくキヨと本当の力ツプルになるためにはこれしかないという結論だった。

そしてそのあと無事に弁当を作り上げ、2つの弁当を大事にカバンに入れて学校へ行った。

「おっはよー、いよっち!」

「あ、伊夜、クマ発見」

信子と佐織が駆け寄ってくる。

「おはよお、今日は5時起きだったんだよ……」

「5時?! 何してたのよ!」

目を丸くする佐織。

「お弁当よ。お・べ・ん・と・う」

うきうきしながら言う私。

「語尾にハートが付いてるよ……もしかしてそれがいよっちの作戦……?」

「そつ！愛妻弁当ならぬ彼女弁当よっ！」

「いや、そのままだって、伊夜」

「何言つてもムダよ、さおりん」

呆れる二人。

「ま、見ててよ。絶対私たち、ビックリするくらいのカップルになるからね」

私は既に勝った気でいた。

一時間目は数学。苦手だが必死で持ち堪える。

……が……眠い！

さすがに5時起きはキツイ。まぶたとまぶたがくつつくのは時間の問題だ。

ヤバイ……もう限界かも……。

睡魔に負けそうなその時、チャイムが鳴った。ラッキーだ！

先生が出ていくと同時に、私は机の上で腕を組み、顔を伏せて眠った……。

「伊夜ー」

「いよっちいー」

……あ、遠くで声がする……。

「ダメだ、全く起きないよ……」

「もう、仕方ない。先に食べよう。間に合わなくなるし」

……ん……？食べる……？

なんか忘れてたような……。

「あ　　っ！」

ガバツと飛び起きる私。

「あ、起きた？伊夜」

「よく寝てたねえ、いよっち」

二人は笑いながらこっちを見て、弁当を開きだした。

「……もしかして……」

「今はお昼だよ。しかも次は移動教室だから今食べないと次に間に合わないよ。ぎりぎりに起きて良かったね、伊夜」

「……今何時？」

「あと10分で休み終わるよ。ちなみに2・3の英語は自習だったよ。助かったねえ、いよっち」

「……次って？」

「確か体育だよ。しかも外だったえ」

タコさんウイナーを頼張る佐織。

「長距離のテストだった。成績引つ掛かるならサボれないよ」

タマゴサンドを食べながら溜め息をつく信子。

「あ……あのさ……、キヨは来なかった？」

恐る恐る尋ねる私。

「来たよ。5分前に。寝てるいよっち見たら『今日はいいって言う』って」だった

………最悪だ。

「キヨと何か約束してたの？」

今度はオニギリを食べる佐織。

「……まあ……ちょっと……」

「あり？そおいえば、いよっちは今日、愛妻弁当だったんじゃない？」

ハムサンドをミルクティと一緒に食べる信子。

「……」

私は……自分のアホさに嫌気がさし、結局その後は何も食べないで

体育に向かった。

ところが只でさえ成績が悪い体育なのに空腹で気持悪くなり、テストは最悪だった。

……放課後、キヨに何て言おう……。

遅い昼ごはん。

「ちよつとお、まだ気にしてんの？」

放課後、佐織が話しかけてきた。

「……悪い？つていうか気にするでしょ、普通……」
机に顔をひつつける私。

「朝の意気込みはなんだったのよ？」

「……もう忘れて……」

弱々しい私。

「キヨと帰る約束してるんじゃないの？」

「……行かないと駄目かな……」

「当たり前じゃない！謝るのよ！」

「……行きづらいよ……」

「あのね……幼稚園児じゃないんだからさ……」

佐織がそう言った時、私の制服のブレザーの右ポケットが震えだした。

私は携帯を取りだし、新着メールを見た。

「何？メール？」

「……キヨからだ」

「ホント？何だって？」

「……校舎裏に居るって……」

「何で？」

「さあ……どういっつもりかな……」

「とりあえず行きなさいよっ！」

バンツと威勢よく背中を叩く佐織。

……なぜかそれにとても元気づけられた。

「……ありがとう、行くよ」

私はカバンをつかみ、扉へ向かった。

「健闘を祈る！」

親指を立て、元気よく言う佐織。

「おうっ！」

敬礼して飛び出す私。

目指すは校舎裏！

風が冷たい。

マフラーに顔をうずめる。

私は校舎裏へ出る扉の前に立っていた。

深呼吸する。

……少し落ち着いた。

私はドアノブを手に取る。……手のひらが少し汗ばんでいる。

思いきって右に回す。

すると、目の前の木の下にキヨが座っていた。

「優秀じゃん。6分で来たよ」

ニカッと笑うキヨ。

「どのくらいかかると思った？」

うつ向き気味に聞く私。

「100分」

「バカッ」

ブツと二人同時に吹き出した。
何故か心のわだかまりが取れた。

「キヨ、ゴメンね……お弁当……」

「ああ、結局友達と食べたよ。気にするな」

「そうなんだ……」

……アツサリ言っただな……。

私は少し拍子抜けした。心のどこかで、私とお昼を過ごせなかったことを残念がってくれるかも……と期待していた。

その時、キヨは手をこちらに伸ばして言った。

「弁当くれよ」

「……はっ？」

「あるんだろ。5時に起きて作ったやつ。お前の食べた余りでも良いから、くれよ」

……どうして？

「何で知ってるの？」

「いきなり一緒に弁当食うなんておかしいと思ったら、信子たちが教えてくれたよ。わざわざ早起きして弁当作ったんだろ」

「……そうだよ」

「オレ……今まで母さん以外に料理とか作ってもらったこと無いんだ。だから……何ていうか、その……嬉しくて……」
照れくさそうなキヨ。

そんなキヨを見ていると、嬉しさが込みあげてくる。

「実はね、昼ご飯イロイロあって食べなかったんだ。だから……いっぱいあるよ」

「マジで？」

「うん。ココで食べよっか？」

「食べる食べる！出してよ！」

私はカバンからお弁当を2つ取り出して、水色の包みの方をキヨに渡した。

キヨは嬉しそうに受け取ると、手早く包みを開きお弁当箱を出した。

「開けるぞ」

「どうぞ、めしあがれ」

お弁当箱を開くキヨ。

「すげえ……ホントにお前が作ったのかよ？」

「そうだよ。……意外？」

「ちよつとな。でもうまそう。いただきます！」

キヨは早速オニギリを掴み、口に運ぶ。

「タラコじゃんっ！大スキなんだよ！……知ってた？」

「知らなかった……たまたまだよ。でも良かった。私もタラコ好きだし」

「そうか！やっぱりタラコはうまいよなあ！」

まるで小さな子供みたいにはしゃぐキヨ。その姿は、到底プレイボーイには見えなかった。

私はその様子を見ながら自分の包みを開いて食べはじめた。

「……あー、食った食った！」

腕を後ろで組み、寝ころぶキヨ。

「お前さ、料理上手いわ」

「そう？……ありがと」

そんな事言われたら……照れるよ。

「あのさ、明日から、こんな感じで作ってくれない？5時に起きるんじゃない？……お前の弁当のついで……とかで」

「良いけど、そんなに気に入ったの？」

「久しぶりだよ。手料理。なんか懐かしかった」

そう言つて、キヨは少し寂しい顔をした。

「お母さんは？今まで付き合つてた女のひとは？」

「母さんは家に居ないんだ。離婚してオレを連れて家を出たけど水商売やってるんだ」

「そうだったの……」

知らなかった……。

「だからさ、いつもコンビ二で食事済ませてる。それに……」

キヨは起き上がり、私を見ながら言つた。

「今まで付き合つてた奴らは、遊ぶだけだったから。メシ作つてくれるほどの関係にはなれなかった」

私はなぜか、キヨの心の声が聞こえた気がした。

キヨがプレイボーイなのは……寂しいからじゃないの？

お母さんは家に居ない。

他に頼る人も居ない。

……だから女の人と取っ替え引っ替え付き合ってるんでしょ？

キヨは木の幹に寄りかかり、空を眺めていた。

私はそんなプレイボーイの肩にそつと寄りかかって言つた。

「明日から、一緒にお昼食べようね。私、キヨの好きなもの作るからね」

プレイボーイは答えるかわりに、私の肩を優しく抱きよせた。

目標の1週間。

次の日から、私たちは私の作ったお弁当と一緒に食べる様になった。そうする内に、自然と一緒にいる時間が増えてきた。

朝登校してきたとき、休み時間、昼ごはん、放課後……。

そして、気付けば約束の1週間が迫ってきた。今のところ……かなり順調だと思う。見る限りでは、心変わりしそうな気配は無い。

キヨはプレイボーイではなくなった！1週間ごとに女の人を取替える軽い男なんかじゃないっ！

そしていよいよ、ちょうど1週間の朝を迎えた。私は最初のように早起きしてちよっぴり豪華なお弁当を作り、学校へ向かった。

「おっはよ！佐織、信ちゃん！」

私は元気よく声をかける。……ところが、二人は深刻そうな顔で何かを話している。

「どうしたの……？二人とも」

私は二人の後ろから声をかける。

「わっ！伊夜っ！？」

「脅かさないでよ。おはよう、いよっち」

二人はかなり驚いたみたいだ。

「何……？何かあった？」

「気にしないで、こつちの話」

なんで？……佐織は必死で何かを隠している……？

「まったく、いよっちは気にしなくて良いの！」
信子も様子がおかしい……。なぜ？

その時、先生がやって来て話はそこまてになった。私は気になったものの、深くは追求しなかった。

そして、待ちに待った昼休みがやって来た。私は弁当が2つ入ったカバンを手に、校舎裏へ行こうとした。

「いよっち、これからお弁当？……キヨと？」
確かめるように言う信子。

「そうだよっ！何てったって、今日は付き合って1週間目だし！」
私は速く行きたくて、足踏みしながら言う。

「そっか……行つてらっしゃい」
佐織は苦笑いな顔で言う。……もう少し明るくても良いんじゃない？

私は少し早く校舎裏に着いた。キヨを待つ事にした。

……遅いなあ。

あと15分ぐらいで昼休みは終つてしまう。

キーン、コーン……

チャイムが鳴った。……予鈴だ。
とうとうキヨは来なかった。

沈んだ私は重たい足取りで教室へ向かった。……なぜキヨは来なかったんだろう……。

教室へ帰った私の表情を見ても、佐織と信子の態度は相変わらずで、同情や慰めは無かった。

みんなおかしいよ。……隠し事ばかり……。

午後の授業は心、ここにあらずであつという間に放課後になった。

私は一人で、いつもの待ち合わせ場所にいた。

……なんで？キヨ。最近はうつとおしいぐらい一緒に居たのに……。顔見れなきや寂しいじゃん。

ふと携帯を見た。

昨日は来ていた、キヨからのメール。

……キヨの声が聞きたいな。
電話しちゃおう……。

私は携帯のアドレス帳からキヨの電話番号を呼び出し、発信ボタンを押した。

すると丁度タイミング良く、少し遠くの方から携帯の着信音が聞こえた。

……キヨかもしれない！

私は音のする方へ行ってみることにした。

この辺から聞こえたハズ……着信音はキヨのだった。

その時、女の人の声がした。

「ねえ、さっき携帯鳴ってたよ。出なくて良かったの?」

すると聞き慣れた声がした。

「いいのいいの。それよりさ、今日ウチ来る?」

……キヨ?

「行く行く。親、居ないでしょ?」

「モチ」

……楽しそうな笑い声。間違いない。あの女の人と話してるのはキヨだ。

「あ、でもさ、彼女いるんじゃない?噂で聞いたけど」
女の人がキヨに尋ねた。

「居るよ。でも、オレはプレイボーイだから」

悪びれもせず、あっさりキヨが言う。

「あはは、彼女かわいいそお」

女の人は笑いながら言う。

そしてキヨたちは出口へ向かおうとこっちへやって来た。

私は隠れる気力さえなかった。

キヨは私を見つける。……氷ついたような顔のキヨ。

後ろで女の人が

「誰、この子?」

と尋ねるが全く反応しない。

私は、この世から消えてしまいたかった。

プレイボーイはやっぱりプレイボーイだったのだ。

あきらめないから。

お互い何も言わない。
何も言えない。

「キヨ、もしかして彼女？」
キヨの後ろの女の人は聞く。だが、相変わらずキヨから返事は無い。
い。

結局彼女は、
「私達、帰るね」
と告げてその場を立ち去ってしまった。

私の頭は考えることをやめたみたいに、はたらくとしない。
キヨは下を向いて黙っている。

「さよなら」

私はそう言って走り出した。それが私の意思かは分からない。気づいたら走っていた。
後ろで声が聞こえた様な気もしたけど……私の足は止まらなかった。

家に着いた私は、キヨ用のお弁当をカバンから取りだし、リビングのテーブルに放りなげた。

「こえー……、弁当ぐらい洗えよ」

先に帰っていた中2の弟・涼汰^{りょうた}が私に言った。

「食べてないから、あげる。部活あったんでしょ？」

私はそう言い放つと自分の部屋へ向かった。後ろから

「マジで？ラッキー」

という、今の私には出せない明るい声がした。

部屋に着くなり、私はベッドに倒れこんだ。……なんでかな……

涙も出ないや。

私は制服のポケットから携帯を取りだし、キヨの履歴を消した。

メールも電話もキヨの文字が無くなった携帯。

私は最後にアドレス帳からキヨを消した。

こうして、キヨは完全に私の携帯からいなくなった。

分かっていたつもりだった。キヨはプレイボーイだ。一人の女で満足するわけない。でも心のどこかで、もう大丈夫だと思っていた。

……私は甘かったの？

キヨには私じゃダメなんだ。夢見がちな私は……かえって負担になっってしまう。もっと広い、プレイボーイでも受け入れて付き合えるような人にならないと無理なんだ。

そんなにダメなのかなあ……。好きな人に、私だけを見ててほし
いて思うこと。やっぱり私は非現実的なのかなあ。

私はワガママだ。プレイボーイなキヨにショックを受けたくせに
……自分から別れを告げたくせに……。

まだキヨが好きだよ。

声が聞きたい。

笑った顔が見たい。

それほどに、私はキヨが好きだった。はじめはしょうがないプレイボーイを更正させるつもりでも、今では自分の一部みたい。無くして気づいた。私はキヨが居ないとダメ。

普通の可愛らしい女の子ならばとつくに泣いているけど、私は違う。

私はベッドから体を起こす。

キヨが居ないとダメなら……キヨも私が居ないとダメなくらいにしなきゃいけない。

私はなぜかふっきれた。清々しい気分。まるで、心のリセットボタンを押したみたいに。

またまだ諦めないから。そっちがそのつもりなら、こっちもやってやる。

その時、携帯が鳴った。未登録の番号。でも、その番号には見覚えがあった。

「キヨ……？」

それは紛れもなく、キヨの電話番号だった。初めて教えてもらったとき嬉しくて暗記するぐらい見たから間違いない。

私は通話ボタンを押した。

『もしもし……伊夜……』

今まで全然聞いたことない、弱々しいキヨの声。

「何？」

『ごめん、えつと……さっきのは……いつから居た？』

「電話の話の辺り」

『そつ……そう……。あのさ、やっぱり怒った？もしかして、俺つてすでに元カレ？』

私は答えない。

『あの……伊夜？』

少し間を置き、私は少し深呼吸をしながら大きな声で話はじめた。
「バツカじゃないの？キヨはプレイボーイなんでしょ？確かにシヨツクで別れようかと思ったけど、冷静に考えたらそれって私が負けたって事じゃない！」

『は？負け？』

電話の向こうから、すつとんきょうな声。

「キヨがプレイボーイなんて汚名を晴らせる様に私は1週間やってきたのに、それが出来なかった上に逃げるなんて私がカッコ悪いわよ」

『あのさ……お前……』

私はキヨの言葉など無視して続ける。

「つまり！キヨが別れたいって言わない限り私は負けないし別れないわ。キヨは別れたい？今日居たあの人と付き合いたい？」

私は一気に言うと、苦しくて少し呼吸が荒くなった。

すると、キヨは予想外の反応を示した。

『プツ……ハハハッ！伊夜、お前すげえや！』

「な……何よ。笑わなくても良いじゃない」

『いや、ゴメンゴメン。でもさ、怒られるか別れ話かと思ってたから一気に脱力したんだよ！……それに……』

「……それに？」

『負けたのは俺の方みたいだ。最近お前とずっと居るのにちっとも飽きないからさ、なんかシャクだと思って別の女と居ただけ……』

……』

少し間を置いてキヨは言った。

『お前という方が居心地良いみたいだ。だから俺、プレイボーイやめる』

……それ、キヨが言ってるんだよね？嘘じゃ無いよね？

『だからさ、俺のこと、また頼むわ。かなり自分勝手だけど』

「……しょうがないな。ま、許してあげますよ。でも、今回だけだからね」

少し涙声の私。……なぜか今、涙が出る。

『分かった。それと、明日は弁当一緒に食おう。絶対行くから』

「分かってます。来なかったらキヨの分も食べるからね！」

しょうがないな。明日も少し豪華なお弁当にしくちや。

『オニギリ、具はタラコな！』

「分かってるよ。ちなみに今日もタラコだったのに……」

『そうだったのか……ゴメン』

「もういい。今日で付き合って1週間目だったから少し豪華にしたけど、明日はもっと良いお弁当にするから」

『うん、待ってる』

電話の向こうから笑い声がする。

私も少し笑う。

『よし、じゃあ、また明日な』
「うん、また明日」

こうして私たちはまた一緒にお弁当を食べるようになった。オニギリの具はタラコ。飽きるまで入れ続けるつもりだ。

佐織と信子のひそひそ話はキヨの事で、女と居るところを見たので私に教えようかどうかを迷っていたらしい。
でも次の日に打ち明けてくれ、私の話を聞いて安心していた。
つくづく、良い友達を持ったものだ。

ちなみに、私はキヨとの電話の後、もう一度電話をした。

キヨのメルアドを聞くために……………。

再登録して一番はじめに来たキヨからのメールにはただ一言、
『今度は消すなよ!』
と書かれていた。

あきらめないから。（後書き）

ここまで読んで下さった方々、ありがとうございます。なんとか完結出来ました。

この作品、とにかく更新が不定期ですいませんでした。この場を借りて謝ります。

では、この辺で。他の作品を見かけたときにはまた目を通して頂けると幸いです。

本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2141a/>

彼氏が欲しい!!!

2010年10月12日05時08分発行